
7000分のいくつかの可能性の小さな穴

上村忍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

7000分のいくつかの可能性の小さな穴

【Nコード】

N81670

【作者名】

上村忍

【あらすじ】

ライブ会場にて、ありえない偶然から始まるお話

(前書き)

自分で読んでもよくわからないお話です。

「ドンドンドン」

ノックの音で、久は顔をあげた。

ズボンとパンツを下ろして、便座に座って本を読みふけていた。ドアがなければ、さぞかし間抜けな姿だろう。

「ああ、ごめんごめん。すぐ出るわ。」

とうの昔に排泄など終わっていたが、トイレという空間は一人の間。結婚生活という常に誰か人がいる状態では、貴重な場所なのだ。

「もう、いつもいつも出てこないんだから。」

水を流し、消臭スプレーをかけていると、ドア越しにしびれを切らした声が聞こえた。

「そろそろ準備しないと時間になるわよ。」

少し怒ったような声で、妻の香織が言った。

水を流し、ズボンを上げながら久は扉を開けた。

「いやいや、ごめんごめん。なんだか読みふけっちゃった。開演は6時だから、まだ時間はあるだろう？まだ、3時だよ。」

すれ違いざまにトイレに入りながら香織が答える。

「開場は4時半よ。普通のライブと違って、お酒とかが呑めるらしいから、きつといるんな出店とかもあるのよ。早めに行って、開場の雰囲気を楽しみたいでしょ？」

「そんなもんかな？ま、いいけど。んじゃ、準備するわ。」

トイレのドアが閉まり、返事はなくなった。

久は、トイレの音が聞こえたらいやだな、と想い、自分の部屋に引っ込んだ。

今日は、あるライブがある。

話題のR&Bを唄う男性のライブ。ゆったりとした雰囲気の中、お酒を出され、それを嗜みながらいい音楽に浸る。そんな少し大人のライブと言われている。

久は28歳、香織は年下の25歳、大人のライブに行くにはまだ早いが、少し背伸びをしてチケットを取ったのだった。

久は、クローゼットの中からクリーニングしていた無印良品の白シャツを着た。

一番上まで、ボタンを留め、デイオールオムのベロアの光沢のある細いネクタイを締める。

その上からユニクロのジャケットを羽織る。

ジーンズはR i g h t - o n、全身あわせてもネクタイの値段より

も安いというコーディネートだった。

だけでも、なんだか高級感のある格好に見えるから不思議である。

久は、みんなと同じようなものの中に、自分なりのアクセントを入れることが好きだった。

人は彼をこう呼ぶ、「天邪鬼」と。

鏡の前で、ポーズを決めていると、香織が部屋に入ってきた。

「あら、いいんじゃない？ 一張羅かしら。」

口元は笑っている。バックに流れる水の音がなければいい雰囲気になったのかもしれない。

「まあね。といっても、お金かけたのネクタイだけだけどさ。」

「お金かければいってもんじゃないのよ。」

言いながら、香織はネクタイを締めなおし始める。

「ところで、トイレのあの本、ほんつと、久は悪趣味というかなんと言つか。普通の人には、トイレにあんな本置かないわよ。」

「ああ、「暗殺者大辞典」かい？ おもしろいだろ？」

「読んでないわよ。あんなの。」

「あれはね、歴史上暗殺された人が被害者と加害者に別れて、アイ

ウエオ順に並んでいるんだ。一番面白かったのはアンディウォーホルかな？逆恨みされて、殺されそうになってるんだ。折り目をつけといたからわかると思う。後で読むといい。詳しく言うからね・・・

「はいはい、後でゆっくり聞くから。私も用意しなくちゃ。」

というなり、香織は部屋から出て行った。マイペースな女だよな、と心の中で久は毒づいた。

久は、自分の部屋の転がっている本の中から、今日持ち歩く本を選んだ。

というのも、常に何か本を持ち歩いていないと落ち着かないのだ。

時間があれば、現実から抜けて本の世界に入り込みたい。それが、久の数少ない欲求だった。

久は、気負わない短編集を選んだ。疾走間が売りの、今話題の作家だった。

題名は「手のひらの迷路」

文庫を手に取り、折り目のついたページをパラパラとめくる。

気に入った話や場面があると、折り目をつけるのは久の癖であった。

香織が用意する後20分ほど、久は本の世界に入っていく、

「片腕」という短編の始めのページに折り目をつけた。

「ちょっと、すみません。」

と声をかけられて、久は本から顔をあげた。

見ると、カップルが久の前を通りたがっているのだった。

ライブ開場は、あくせ、までのブロックに分かれており、久の座っているのは「い」の6番、隣は7、8と続いている。

どうやら、カップルは隣に座るようだった。

「あ、すみません。どうぞ。」

久は、足を引き、道を譲った。前のイスまでは60センチくらいだろうが、背の高い久にはちょっと狭い空間である。

「ありがとうございます。」

はっきりとした声でカップルの女性が答えた。

その瞬間、女性と目が合った。

アーモンドを横にしたような、くりっとした目が特徴的な美人だった。

髪を上で一つにしばっていて、見た瞬間、なんだかリスに似ていると思った。

久は、自分の横を通り過ぎる女性を観察した。

黒いコートは腕に抱え、手触りのよさそうなタートルネックのニットを着ている。上には、アーガイルのカーディガンを羽織っていて、トラッドな印象を受ける。

「よいしょ。」

久の隣にリスの女性が座り、その横に彼氏であろう少しゴツイ男が座った。

年は、自分と同じくらいだろうか？座ったら、久の方が頭一つくらい大きく、ちょうど髪をしばっているところが目についた。

髪をしばるゴムには、黒いガラス玉がついている。

ちよつと、かわいいな。と思ったけど、久はまたすぐに本の世界に入った。

逆隣に座っていた香織が言う、

「ねえ、こんな雰囲気の中、本を読むって中々ないと思うけど。」

「そうかな？」

「そうよ。変な人だよねえ。」

香織はため息混じりに言った。口ぶりとは逆に目は笑っていた。

「でもね、考えることがあるんだ。」

「なあに？」

「今、この瞬間の開場の人は、みんな歌手の登場を心待ちにしている。同じ方向に向いているよね。」

「ん〜。」

「同じ現実の中に生きている。同じ空間を共有している。ま、そういう場所に来ているからなんだけど。」

「わかるような、わからないような・・・」

「でも、その空間で僕は本を読んでいる。この現実の空間から、切り取られて、僕のところだけぽっかりあいているみたいだね。それが、なんだかすごく心地いいというか、贅沢な感じがするんだ。」

「・・・よくわからないけど、あなたがどうして天邪鬼と呼ばれているのか分かった気がするわ。」

香織のあきれた顔に、なんだか勝った気がして、久はまた本に目を落とした。

ふと見ると、隣のリスの女性が本を出していた。

隣のカップルも会話もなく本を読んでいる。

ブックカバーをかけているので、タイトルはわからなかった。それは、自分も同じだが。

人前で本を読むとき、必ずブックカバーをかける。何を読んでいるが見られることで、なんだか自分の人格まで見られているような気がするのだった。

なんだか親近感が湧いた。

「開場の皆様にお知らせします。当店、K e n n i s b a r にご来店いただきましてまことにありがとうございます。会場内にて、カメラつき携帯の・・・」

久は顔を上げた。時間は5時45分を回っていた。

「ちょっと、トイレに行つて来るわ。」

香織に声をかけ、足元のトートバッグに本を投げ入れる。

トイレは長蛇の列だった。

やれやれと想いながら、久はしかたなく最後尾についた。

前の男性は、50代も半ばだろうか。脂ぎったにおいが鼻について、顔をしかめた。

横の男からは、酒のにおいがする。

並んでいたら、呑みすぎた女性が道で吐いて係員とつるたえているのが見えた。

やれやれと思った。

こういう人たちと同じ時間、空間を共有するかと思うと、若干楽しみさが薄れた。

トイレには、姿見があり、後ろの男性は、トイレに入るなり姿見で髪を直した。

少しげんなりした気持ちで席に戻った。

「すごい混んでたわ。」

「女子トイレもすごかったわよ。」

会場を見ると、ほぼ全ての席が埋まっていた。

ふと隣を見ると、カップルが観光マップを手に話している。

どうやら札幌の人ではないようだ。

少し親近感は薄れた。

まもなくライブが始まるようだった。

ライブは素晴らしかった。前半と後半に分かれており、前半が終わったとき、久は2回ほど涙を流していた。

歌を聴いて涙を流すという感覚を初めて知った。悪くないものだと久は思っていた。

会場の雰囲気も暖かいもので、一体感を感じていた。

前半が終わって、会場が明るくなり休憩が始まった。

周りを見ると、ハンカチを持っている人や伸びをしている人など様々だったが、みんないい顔をしているようだった。

そんな会場の人を見ながら、久はカバンの中の本に手を伸ばした。

さつき読んでいた短編は途中だったんだよな、思っページを開くとなんだか違和感が。

手に取った本は、「世界暗殺者辞典」だった。

本は、しっかりと折り目もついている。かといって、自分の家のトイレから持ってきたはずはない。

カバンの中をもう一度調べてみるも、やっぱり本はない。

香織に声をかけようとして、振り返ろうとした瞬間、隣のリスの女性がカバンを持ってトイレに立つのが見えた。

久のカバンと同じようなトートバッグ。と、すると可能性としては間違えて入れてしまったのだろう。

戻ってきたら声をかけてみよう、そう思いなおした久は、せっかくだからと手元の「世界暗殺者大辞典」を開いた。

パラパラとめくると、途中で止まるページがある。

折り目がついているのだった。ジョンレノンのページである。

その瞬間、会場の中の一団となった空間の中、自分とリスの女性との空間だけぽっかりと開いたような気がした。

会場7000人の人間の中で、本を通して僕とあの女性だけが違う空間でつながったのだ。

それはどのくらいの確立なんだろう？そもそも本に折り目をつける癖が、自分の他に持っている人間がいること自体信じられなかった。

久は、横に座っている香織を見た。

なんだかとても罪悪感を覚えた。何かとても悪いことをしているように、びくびくと恐れて、目を合わせることができなかった。

香織は、まだ余韻に浸りうっとりとしていた。歌の素晴らしさに心を奪われている様子だった。

そんな中、久は、他の人間と空間を共有していることを恐れた。

そして、久はそつと、アンディウオーホールのページに折り目をつけた。

「ご来店の皆様、大変お待たせしました。これより、a c t 2を開店したいと想います。」

会場のアナウンスがなり、場内は暗くなっていく。

暗くなった後で、隣のリスの女性が戻ってきて、足元にトートバッグを置いたのを感じた。

後半の部が始まり、相変わらず素晴らしい歌で、久はまた1回涙を流した。

涙を流しながら、久はそつと隣のトートバッグに本を入れた。

「みんな、アンコールありがとう。」

という言葉の後、最後の曲が演奏された。

最後の曲の最中、一瞬ピアノを弾くのを間違っていたが、そんなものは差し引いても素晴らしいライブだった。

会場の照明がつき、人の波が出口に押し寄せる。

気付いた時にはリスの女性はいなくなっていた。

「いや、すごいよかったよね。」

隣の香織は、目を赤くしながら興奮気味に話しかけて来た。

久は、会場の雰囲気や段々と崩れ、一体感がなくなるのを感じながらトートバッグを取り出した。

中には本が入っている。

題名は、「手のひらの迷路」

久の持ってきた本だった。ただ、違ったのは、

「片腕」という話と、「片足」という話に折り目がついていた。

7000人の中で、一瞬だけ確かにつながったのは夢ではなかった。

久は、本を優しく撫でると、トートバッグに入れた。

「お腹すいたな、何かおいしいものでも食べに行こう。」

「いいわね、私もお腹ペコペコ。」

腕を組んでくる香織に若干の後ろめたさを感じながら、久は来年も必ず来ようと心に誓っていた。

(後書き)

んな、わきゃあない(タモリ風)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8167o/>

7000分のいくつかの可能性の小さな穴

2010年11月9日23時42分発行